

のしたを通して石橋のある二百メートル手前地点で、  
井班長以下十五人の真正面のトーチカからはじめて聞く  
音を立ててソ連製プロニングが攻撃してくる。

砲兵隊の三発目がトーチカのなかにはいる。また中隊  
長命令で、各個前進、はじめて最後の突撃。一人に弾が  
あたったが突撃成功、谷口班長の手榴弾がトーチカには  
いって一段落。

七月三十日、福田班長戦死により夜、告別式後、火の  
番に着いたのち、玩江地区の警備、終戦となる。

## 死んだ方が楽、生と死は紙一重

静岡県 松浦 貞一

(一) 死んだ方が楽になると思ったこと

血豆が破れて編上靴の上に泡が出た

武漢攻略作戦中のこと。揚子江安慶に上陸、六安を経  
て信陽への行軍中の三日目か四日目だった。

重装備六十キロに軽機関銃、自分の体重以上の装備に

足の底豆が破れて靴のうえに赤い泡が吹き出してきた。  
靴のなかはヌラヌラ、痛さに涙も出ないつらさ。今思  
いだしてもゾットする。

底豆の治療は野営の時、衛生班に行きヨーチンをもら  
うだけ。

痛さとつらさを思い出すだけで身体がふるえる。よく  
も耐えたと思うこの身体・耐えさせられたといった方  
が本当かも知れぬ。

生水を腹一パイ飲みたい

信陽への行軍が続く。乾ききった大陸の灼熱の炎大下  
四十度をこすなかの行軍。我々歩兵は字のごとく歩く兵  
隊、歩くしかありません。重装備六十キロ、軽機関銃を  
かついで水筒に一杯の水を携行、大別山系を三十キロ以  
上の強行軍でした。

汗とはこりにまみれ上衣ににじみ出る汗は白い塩と  
なって浮きでてくる。一滴の水もおとしい。最後の水筒  
の水を手のひらでたいたいてなめる。今思えば酒の好きな  
人が徳利をさかさにして手のひらでたいたいてなめている  
あの姿と同じだった。

水をゴクゴクとのを鳴らして腹一パイ飲みたい・  
水のおとさを知る。

マラリヤにかかり炎天下

外套を着て行軍

行軍中四十度以上の灼熱の暑さなのに、ブルブルふるえ、動悸がはげしく、寒くて寒くて背筋がつっぱり背中に外套を着て隊列についていく。

しばらくすると身体の力が抜けてくる。熱のために歩けない。戦友がバンドで引っ張り。うしろから押して進ませる。隊列から離れることを許されず・自分ではなにもわからない。苦しい。せつないことのみがわかつている。

「死んでもよいから離してくれ」と力のない細い声でたのんだ。

野営の時に衛生班で薬をもらって、また明朝から行軍する。

(注 マラリヤの治療により内蔵疾患を煩い、入院し、  
信陽、漢口、上海の各病院を転院し、病院船で送

還されました。)

日射病でたおれる

道は炎天でホコリが立ちこもり、灼熱の太陽に汗を流し切る。脂汗が出た。歩け歩け、ただ無我夢中、頭がポットしてきた。もうすこし行けば小休止になる。それまで頑張ろう。下腹部が張って用便がでない。

もうすこし歩くんだと、「痛い」と大きな声で叫んでたおれたように思った。まわりに衛生兵が心配そうに顔を近づけている。気がついたら「しっかりせい」と。

暗いところから私を明るいうちに引っ張りあげてくれたような気がする。胸を一パイハダケ、木陰の涼しいところにいた。私は日射病で意識を失って倒れたのでした。

あとの話では、なかなか正気にならず、最後の手段として気つけの注射をしたらしい。行軍中なので応急手当をして糧秣の車に荷物と一緒に乗せられ、ガタガタ道を部隊を追って行軍する。

体が痛い。頭が痛い。骨がバラバラになるような気がする。我慢をするしか方法がないのです。

厳寒の夜行軍中クリークに落ちる

冬期作戦のときだったと思います。敵の攻撃を受け、突然後退することとなり、夜間行動となる。

肌を刺すきびしい風雪のなかを行進中、クリークの土手を歩いているとき、軽機関銃をかついでいた私は、足をすべらせて厚い氷を割ってクリークに落ちた。ただ夢中ではいあがろうともがいた。

結局、戦友がお互いの手をつないで引きあげられたが、ズブ濡れ、泥まみれ。でも行進は止まらない。

歩く度にビシビシと音を立てて着ているものがこおっていく。分隊長が凍傷になるのを心配して「着がえをするか」といつてくれたが、大丈夫と答え、頑張って歩きつづけました。精神力はたいしたもので、自分の身体の熱気で凍傷にもかかわらずに済んだ。

## (二) 生と死は紙一重

冬期作戦のとき、私たち分隊は夜間、敵の状況をさぐるために斥候に出発しました。空は真っくらやみ、警戒しながら進む。山の稜線に夜目にも人の動くけはい、敵の配置状況をさぐり、二時間くらいのおいだ、敵に気づかれないように、その場をはなれ、一時間ほど歩いて

やっとホットした。緊張の連続でした。

分隊長が

「ひと息いれてどこかで休憩していこう」

といったので、私がクリークの向こうの家を指さし

「寒さしのぎにあそこでどうですか」

と申しでて、さきを走ってその家にはいった。

ところがなんとなく人のけはいを感じたので、

「スイヤー(誰か)」

と中国語でいったらモゾモゾして幾人かの中国兵が出てきた。

「シエンマー(何だ) ニイー(お前) スイヤー(だれか)」と銃をかまえた。

私の声に皆一斉に銃をかまえ、とりかこんだ。一瞬の出来ごとで機先を制した。分隊長が

「服装検査をしろ、危険なものはずせ」

中国兵が十数人であった。チェコ銃一丁、小銃二三丁、手榴弾一五個の分どり品の大戦果だ。彼らを引っ張って部隊へ帰った。

すでに東の空が明るくなってきた。隊長に報告。

「よくやった。ご苦労。」

の言葉に満足し、休む暇もなくつぎの作戦行動の準備を始める。

あの時、もし敵にさきにつかっていたら、我々分隊は全滅だった。一瞬のできごとに機先をせいし行動を実行することが大切だと思います。もしちゅうちょしてごてになつたらぎやくにやられていたのではないかと……。生と死とは紙一重……。

後からはいった情報によると、彼らは部隊の先兵として日本軍の配備状況の探知を命ぜられ、途中休息しているところだったとのことでした。

「危ない、敵さん見張りの歩哨を立てていたらならば」と思うと、ゾットする。

戦場ではいろいろの事件があり、撃つか（生か）撃たれるか（死か）どちらか一つだ。つらさ、苦しみに耐え抜き、とっさの判断が生か死をわかっ体験をしました。

戦いすんで

信陽を出発、尖山付近の戦いで、正月の餅を一切れづつ配給された。戦友と内地（故郷）の雑煮の味の話に花

を咲かせ、同じ正月でも今頃は現役入隊で年頃の娘たちから笑顔で「おめでとう」の言葉を掛けられ、張り切っていたころだったと回想のひとつを過ごした。

私たちは山の稜線にて、本隊警備の分哨に出た。西ヶ谷分隊長が負傷して、私が代理の一分隊長であった。塹壕を掘り、斜面に向かって銃座をつくり、五メートル間隔に各人の掩体壕を掘り、夜の警備にはいった。宵のうち銃声もなく

「奴さんたち逃げたのかな」

「ありがたい。明日はパイ缶ぐらい官給品が来るぞ。うれしいな。正月だものゆっくりしたいなあ」

と、食うことが一番の楽しみだったので。

歩哨交代をして夜半過ぎのころに、山の斜面でなにかザワザワと音がする。闇のなかに人のけはいがする。私は射手の伊藤上等兵（官昌作戦で戦死）に二、三発撃てと命じた。

これを機に彼我の銃声があちこちで起こった。奴等、笛や太鼓でドンドンジャラジャラ鐘の音とともに喚声をあげて攻めてくる。こちらにも必死に撃ちまくった。

約半時間ぐらいの攻防であったが、ずいぶん長い時間のような気がした。銃声がたえたので、隣の分哨に山柴一等兵を伝令に出し

「第一分隊全員無事。異状なし」

と連絡した。第二分隊も全員無事とのこと。それから夜明けまで緊張の連続であった。この夜は墨を流したような真つ暗闇であった。つぎの夜襲にそなえて全員を確かめ配置につく。

私はうしろに補充兵の新兵が

「分隊長、うしろから敵が来るように恐ろしくてふるえが止まらない、そばにおいて下さい」

と泣いている。私は

「ここにおれ、敵がきたら軽機の弾が切れないように運ぶんだぞ」

心の中で死ぬときは皆一緒だ。朝まで頑張ろう。現在地を死守しなければと覚悟した。

長い冬の夜が明け、東の空が白んできたときの嬉しさ。梅原上等兵が

「松浦分隊長、また命が助かった」

とおどけた仕草にみんなつられて笑いが出た。みんな無事で良かったなあ。

「チャンコーの奴、にぎやかにやって来やがって、やはりチャンコーだ、逃げやがって」

と明るくなって草むらを見ると、十メートル前方の草が倒れており、死体がころがっている。敵さんあわてて逃げたのか死体をほったらかしにしてある。

朝の日の美しさに目をみはる。山のうえに太陽のありがたさ。冷たい風さえさわやかである。はく息もまっ白い雪も正月の味。早くパイカンを食べたい。

戦いすんで、東の空に向かって大きな声で、

カーアサン・カーアサン……

思い切り腹の底から帰りたいナー故郷に……

目頭があつくなる。

「経験は我が身の宝なり」。辛いこと、悲しいこと、恐ろしいこと、切り抜けてきたのもみな戦場で生と死を乗り越えた経験のお陰かもしれない。

戦争は二度と起こすまじ。二度と繰り返すことのないよう祈ります。